# ROSSI四季報

Research Organization of Social Sciences（立命館大学BKC社系研究機構）

Rits

1999年6月

第 5 号


CONTENTS


〈巻頭言〉21世紀へむけた人材養成　平田　純一　……1

立命館大学・中国社会科学院経済研究所シンポジウム報告　岩田　勝雄　……2

複雑系と情報圧縮　高木　彰　……3

21世紀の経営システムをめぐる議論によせて　山崎　敏夫　……4

アメリカの国際課税戦略　飯野　公央　……5

総合都市開発のためのマルチプロジェクト実施シミュレーションモデルに関する研究　春名　攻　……6

自動車、電化製品の廃棄＝解体工程の実態リサーチ　山口　歩　……7

地域中小企業者と福祉産業　芳野　俊郎　……8

ベンチャーキャピタルとキャピタリストの育成について　黒木　正樹　……9

中高年への健康サービス研究　岡本　直輝　……10

少子高齢化社会の経済分析　平田　純一　……11

環境ＩＳＯの研修講座　平井　孝治　……12

Market Model の適合性とは？　赤堀　次郎　……13


## 巻頭言


立命館大学 BKC社系研究機構
機構長 平田　純一


### 21世紀へむけた人材養成

日本経済の1990年代は、平成不況から脱出できないままに終わりそうな気配である。一方で政府の公共投資の増加等を引き金として、21世紀に入れば景気も回復するのではないかという期待感も生まれつつある。現実的には日本経済の潜在成長率の低下から、プラス成長への転換は可能でも５％を越える経済成長は期待薄であろう。

潜在成長率の低下原因として産業の空洞化、人口の高齢化等複数の要因が指摘されるが、21世紀における日本の労働力の質の低下が重要な要因になる可能性を指摘しておきたい。

日本の学生諸君が学校教育によって身につけている基礎学力水準は、確実に低下している。日本の高度経済成長を支えた重要な要因の一つは労働力の質の高さ（教育水準の高さ）であった。高度経済成長終了後も10数年前までは、企業に入って仕事をする上で必要になる基礎学力は、高等学校までに修得済みであり、大学で何を学んだかはあまり問われなかった。また大学における一般教育は高等学校までの教育の繰り返しであり、重要性が低いということも言われていた。

現在大学に入学してくる学生諸君の読み・書き・計算に関する基礎学力は、きわめて憂慮すべき状態にある。詳しい説明を行うスペースはないが、これまでは平均的な基礎学力の低下と個人間の学力格差の増大が問題にされてきた。現在では社会に出てから必要な基礎学力をバランスよく身につけた学生諸君が減少し、得意分野と不得意分野との差の大きい学生諸君が増加している。

1990年代に入って、大学におけるカリキュラムも高等学校までのカリキュラムと歩調を合わせて弾力化された。大部分の大学で教養部を廃止し、一般教育の単位数を減少させ、一般教育の科目も伝統的な学問分野に直結する科目を減らし、課題重視型の総合科目等を増やしている。この結果一般教育に対する学生諸君の不満が減少する一方高等学校までの基礎学力のばらつきを大学で教育し直すことも困難になっている。

大学における教育システムを見直し、専門分野の教育と基礎学力を鍛え直す教育とのバランスを見いださなくてはならない。現在は基本的な調査の必要性が認識され始めたところであり、対応には時間がかかる。結局、21世紀に社会に出る学生諸君の基礎学力が社会で期待する水準に達していない可能性が高くなっている。